

震災復興とスポーツ
～風化させないためにできること～

札幌大学スポーツ文化専攻東原ゼミ C 班
○面来優希 中野恋 長野亮友 高屋沙里奈

1、緒言

2011年3月11日、東日本大震災が発生した。これにより岩手、宮城、福島を中心に甚大な被害をもたらした。あれから5年経った今、復興はまだまだ道半ばである。

熊本でも地震による被害を受け災害に対する対応が急務となっている中私たちは、東日本に限らず災害に対する関心が希薄になっている現状にあると考えた。毎日新聞の行った全国世論調査においても「震災における関心が希薄になっていると感じる、または自分自身がそう思うか」という質問に対して、「ときどき感じる」との回答が51%、また、「よく感じる」との回答が28%とおよそ8割が「風化」を意識している結果となった（毎日新聞、2016.3.8より）。東日本大震災の被災した地域やそこに住むが薄れて人々への中長期的な支援のあり方や向き合い方など意識が希薄になってきていることがはっきり表れる結果となった。これを受けて風化を防ぐために何が必要か検討する必要がある。

2、研究目的

本研究は、スポーツの特徴を利用し、震災を風化させないための活動に必要な条件を提案することを目指す。

3、研究方法

- i、福島県の現状と課題について調査する。
- ii、スポーツを使う意義を示し、心的ケアにもたらす影響について調査する。
- iii、実際に被災地との交流事業を行っている団体ないし個人がいないか調査する。
- iv、交流事業に実際に参加し体験するとともに参加者にアンケートを実施し、スポーツ活動を利用した交流事業の成功条件を提案する。

4、研究結果

i、現状と課題

- ・放射線の影響

表1 福島県川俣町における空間放射線量

	2011	2012	2013	2014	2015	2016
空間線量(μSv)	4.93	0.59	0.21	0.17	0.14	0.11
県内平均(μSv)	0.14					

※出典：福島県 福島県放射能測定マップ (2016/10/5)

しかし、これは官庁発表のもので、実際に川俣中の子ども達は、グラウンドの線量は高く、屋外でのスポーツ活動が制限される状況にあった（関係者談.2016.7.31）

・ 心的悪影響

放射線が人体に与える影響としては、発ガンや遺伝影響などが報告されているが、放射線被害におびえることによる心理的悪影響もある。

主な影響は以下のとおりである。

EX) ・ 不安障害

- ・ 分離不安障害
- ・ 強迫性障害
- ・ 身体化障害、心身症
- ・ 睡眠障害、習癖の悪化、遺尿（夜尿）など
- ・ 心的外傷後ストレス障害（PTSD）

（文部科学省 平成 23 年 6 月 24 日 ）

ii、スポーツを使う意義について

文部科学省の見解によるとスポーツには以下のような効果があると指摘されている。

- ・ 心身の健全な発達に必要不可欠なものであり、人々が生涯にわたってスポーツに親しむことは、極めて大きな意義を有している。
- ・ 爽快感、達成感、他者との連帯感等の精神的充足や楽しさ、さらには精神的なストレスの発散、生活習慣病の予防など、心身の両面にわたる健康の保持増進資するものである。
- ・ スポーツを通じて交流を深めていくことは、住民相互の新たな連携を促進するとともに、住民が一つの目標に向かい共に努力し達成感を味わうことや地域に誇りと愛着を感じるにより、地域の一体感や活力が醸成され、地域再生にもつながる。

（文部科学省 スポーツ振興基本計画 1 総論 平成 23 年度）

実際に熊本地震の際には子供の心のケアのために遊びを用いた運動によって不安を解消する活動を行った例もあり、運動が精神的な安定に寄与していることは明らかになっている（朝日新聞デジタル.2016.4.27）。また、ユニセフでも同様に遊び、すなわち運動を行うために積極的に体を動かすことを目指し公園の区画整備や「冒険遊び場」といった企画の中で子どもたちの不安を解消する運動を実施している（日本ユニセフ協会緊急・復興支援活動レポート 2016.3）。

iii、交流事業について

- ・ 各地で行われている交流事業

岡山県・・・AMDA の行っている事業で緊急医療活動で入った地域の釜石中、大槌中、志津川中を岡山県に招待し、8月2日～6日にかけてサッカー交

流を行った。(AMDA 2011年8月17日)

東京都・・・東京都八王子市と福島県福島市の交流事業で、八王子市において少年軟式野球大会を実施した。

(東京都スポーツ振興局 東京都体育協会 平成24年8月9日)

例：北海道岩見沢市栗沢町立栗沢中学校と福島県川俣町立川俣中学校の交流

「キヨマッププロジェクト」について

今回で三回目をむかえたキヨマッププロジェクトはもともと震災復興事業として辰田氏の働きかけによって実現した。

痛ましい震災を経験し、多くの命が奪われるのを目の当たりにし、何か自分たちにできることはないかという思いから、「福島の子どもたちと一緒に思いっきりサッカーをしたい」という願いのもとスタートした。

今年は2016年7月30日～8月3日という期間で開催された。交流内容としては、サッカー交流を始め元プロサッカー選手によるサッカー教室、ジンギスカンパーティー、私たちの大学生企画、記念プレスレット作成などがある。

参加者の声としてはサッカーだけでなく、お互いが交流できるプログラムが多くあるので良い、普段満足にできないサッカーを思う存分できて良かったという回答が見られた。



図1：キヨマッププロジェクトの集合写真



図2：大学生企画の様子

iv、アンケート結果（ここでは抜粋して紹介）

表2 アンケート回答者概要（全体で42票）

	1年	2年	3年	高校生	保護者	全体
栗沢中学校	6	6	9	2	0	23
川俣中学校	8	2	2	5	2	19

キヨマップに参加したきっかけは？

- ・相手の学校と交流したかったから 14票 33.3%
- ・サッカーがしたかったから 11票 26.2% など

一番印象に残った企画は？

- ・夜のイベント 20 票 47.6%
- ・ジンギスカンパーティー 10 票 23.8%
- ・サッカー交流 6 票 14.3% など
- ・考察・議論

上述のとおり印象に残った企画についての項目の票数の割合としては「夜のイベント」が 47.6%、「ジンギスカンパーティー」が 23.8%となった。これには参加者の純粋な思いが表れたのではないかと思う。調査結果を統合すると、サッカーを楽しむことが最も重要なのではなく、上記のように他人との思いを交流し、継続的な関係を築き続けることが被災地の子供、保護者の方々の本当に求めているものであると考えられる。

5、政策提言

上述の通り被災者の求めるものは思いを共有できる場所でありコミュニティなのであり、その場所を作り出すのがスポーツの役割である。当初、スポーツのもたらす効果としては心のケアに良い影響をもたらすため被災地でスポーツ事業を行うことに意義があるとされていたが、アンケートの結果からスポーツをすることではなく、何よりも重要なことはスポーツを核に同じ思いを持った人が集まり、継続的な関係を作り維持することである。そういった活動を運営面でサポートし今後も続けていくことが求められていることであり、そして運営だけでなく思いを聞き入れ寄り添うことも非常に重要である。以上の考察・議論から、スポーツを用いた被災者との交流事業の成功条件とは、思いを共有し、寄り添うことでコミュニティを長期的に築くことであると言える。それが、私たちに求められる「関わり方」であると考えられる。

<参考文献>

- ・朝日新聞デジタル (2016/4/27) 熊本の子どもたちに、息の長い「心のケア」を
<http://www.asahi.com/sp/articles/ASJ4V7D9BJ4VUBQU00R.html>
- ・AMDA (2013/9/19) 救える命があればどこへでも amda.or.jp
- ・東京都体育協会(2016/8/15)「被災県とのスポーツ交流事業」の実施について
[Metro.tokyo.jp>press>2016/08/15](http://metro.tokyo.jp/press/2016/08/15)
- ・福島県 (2016/9/30) 福島県放射能測定マップ fukushima-radioactivity.jp
- ・毎日新聞 (2016/3/13) 社説 大震災から5年 子どものケア 見えない傷に寄り添う
<http://mainichi.jp/articles/20160313/ddm/005/070/003000c>
- ・文部科学省 (2011 年度) 文部科学省 HP スポーツ・青少年局企画・体育課 スポーツ振興基本計画総論 [www.mext.go.jp>a_menu>sport>plan](http://www.mext.go.jp/a_menu/sport/plan)
- ・日本ユニセフ協会 (2016/3) 緊急・復興支援活動 5年レポート P7~8
http://www.unicef.or.jp/kinkyu/japan/pdf/5_year_report.pdf